獨で山に椎の實採りに行つた。枝下四間許りの眞直ぐな木を攀ぢ登り最初の大枝に取りつき頭を上げて上枝に房々と生つて幾つとなく黑い實がはぢけ出して居るのを眺めつゝ夢中になつて椎の實の多い枝を目がけて進んで行かうとする途端片足を踏まへてゐた枝がポキンと折れる音がしたと思ふと同時に身體が宙にぶら下つた。下がつた足で搜つて見たがそのあたりに足場になる枝が無い。シマッタと思つてもがく拍子に何うしたはづみにか枝につかまつてゐた手を取りはづして身體はズル〳〵と幹に沿ふて落ち始めた。

私は子供心にも氣も心も顚倒して其後は自分で何をして何がどうなつたか少しも覺えぬが、暫く經つて木の根下でドシンと尻餅をつき頭の心にグワンと答へたことだけを記憶してゐる。あとで正氣に還つたまで何分位經つてゐたかあたりに誰も人が居なかつたので勿論分らない。併し何分約四間の高さを墜落したのであるから、一時氣絕したに相違ない。幸にして墜落と同時に本能的に幹を抱くやうにして滑り落ちたので幾分か加速度の勢を殺いだのと樹の下に幸ひ石もなく稍彈力のある枯葉があつたのとで身體には少しの負傷もなかつた。夢中で

枯枝を踏み折つた瞬間には身體全體がズーンとして矢庭に地獄にでも突き落されたやうな心地がしたが樹の下で正氣に還つた時にはまだ此の世に生きてゐたと分つてホット安心した。併し暫時は眼がちらつき頭がふらつくやうな心持がしたが家に歸つた時には最早何ともなかつた。其の夜も別段發熱もせず平日の通り無事に過ぎた。翌日から何時もの通りに學校に行つた。若し此時に卽死してゐたら大事件となつたらうが幸ひ無事であつたので椎木墜落一件は私自身の外は誰も知らずにすんだ。其の後子供が木から落ちて死んだ話などを聞けば何時も私はその時の事を思ひ出して命拾ひをしたのだなと思はぬことはない。

第二回の命拾ひは第二高等學校生徒の時代で元氣旺盛な十九歲の時であつた。或る夏河原の邊に散步して居ると人が大勢集つてワイワイ噪いでゐる。何事かと思つて近づいて見れば河向の斷崖の上の家の雞が逃げて斷崖の岩の蔭に止まつてゐる。石を投げるやら遠卷きにするやらして色々追ひ出さうとするが鷄はよき足場に據つて少しも動かぬ。見れば斷崖に容易く登られさうである。私は青年の客氣に驅られて何とはなしに其の雞を捕へてやらうと言ふ氣になつた。

因より始から命を的に賭けてまでとは考へなかつたが事實は豫想外に命賭けとなつた。素早く衣服を脱ぎ捨て河を泳ぎ越して對岸に着き手で土を堀り除けて足場を作りつゝ斷崖を登り始めると子供等は聲を揃へて危ぶないからよせよせと呼んだ。私は此聲に構はず依然手で土を除けて足場を作りながら約三間程登つた。下を見れば川が淵になつて水は青く淀んでゐた。上を見れば難の所まで僅か一間許になつた。難は私の近づくのを知つてか知らずか落ちつきはらつてヂットしてゐる。私は今一息と思つて一足進めようとする刹那片足の足場がゾロ〳〵と崩れて踏み止まることが出來ず、次の瞬間には身體はケタタマシイ水音を立てゝ淵の中に落ち込んだ。其のはずみに私は左足の踵を水底の岩石でイヤト言ふ程激しく撲つて其痛みで思はず水中から飛び上つた。此の墜落は三間の斷崖からであつたが幸ひ水中であつた爲に命に別條はなかつた。併し左足は其後二週間餘痛みが去らず歩行に困難した。今年の夏京大の學生が日本アルプス登山をやつて穂高の斷崖から墜落して死んだ話を聞いたが其の原因は雨後で足場が崩れた爲であつたさうである。此の場合には斷崖が高く墜落の途中一二度

宙返りをうつて下の積雪に頭を突き込んだ儘死んでゐたさうである。此の記事を讀んだ時に私は座ろに自分の墜落を思ひ出して私は幸ひに助かつたから何ともないが若しあの時直ぐに水中に落ちず途中の岩で頭を打つか又は岩の上にでも落ちてゐたものなら固より命はなかつた。私は當時のことを思ひ出す度びにゾットする。似たやうな斷崖に臨む度びに此の墜落を思ひ出す。

第三回は海外留學の歸途米國ケムブリッチに起つた事で明治四十五年一月私が三十九歳の時である。當時ハーヴアート大學に學んで居られた出村悌三郎氏の下宿に同居して其の日午後四時から大學構内のエマーソン、ホールで日本にもよく名の知られるエール大學のラッド先生の講演があるといふので出村氏の知人の一米人と同行して聽講に出かけた。此日は雪降であつたが其の途中雪のつんだ敷石の上を滑つて轉んだまでは覺えてゐるが其後の記憶が少しもない。其時米人は私を助け起し普通のやうに二人で對談しエマーソン、ホールに行つて何事なく聽講した。談變つて出村氏は何時まで待つても私が約束の時間に下宿に歸つて來ぬので不審に思つてエマーソン、ホールに來て見れば講義は既にすんで

しまつて聽衆の人影もない所に私は一人で廊下を往つたり來たりして居たさうである。私は出村氏の顏を見て此處は何處だ今日は何時だなどと分りきつた事を尋ね出村氏が答へるとさうかと言つて又二度も三度も繰り返して同じ事を問答したさうである。出村氏は不思議に思つたがまだ食事が濟まぬと聞いてとりあへず二人で食堂に行つて晩餐を共にした。然るに食事中に私は右と同じ事を尋ねるので出村氏も少し變に思ひ出し先きの米人に尋ねて見ると途中歩道で滑り轉んで後頭を撲つたが其の時に何も異狀がなかつたのでエマーソン、ホールで別れたとの事であつた。出村氏は後頭打撲が原因であるといふことに氣がついて早速醫師とも相談して寄宿舍の一室を借りて安靜に休む事になつた。

私自身は滑つて轉んだ瞬間までの記憶はあるが其後聽講した事もエマーソン、ホールの廊下で出村氏に見出された事も一所に食事をした事も寄宿舍に連れて行かれた事も少しの記憶が無い。本當に正氣に返つたのは其夜の十時頃である。夫れからの記憶は今でも明瞭であるが夫れ迄の行動や問答は全然無意識の中に行はれてゐた。私は其の間全く夢遊病者と同じ事をやつてゐたのである。人間

は生命のある間に意識は明瞭でなくとも本能的に生存に必要な行動を執ることは實に不可思議と言つてもよい。意識を恢復する前に出村氏に向つて乘船切符の所在などを尋ねてゐたさうであるが正氣に返つてからそれを搜し出して初めて安心した。無意識中にも歸國することを考へてゐたらしい。

正氣に返つてから先きの米人も見舞に來て呉れて同人から一伍一什を聞いて精神の不思議な作用に驚いた。出村氏は哲學が專門なのでかゝる精神現象に深い興味を持ち特に精密に經過を記錄された。出村氏は東北學院に居られる。

北米の冬は寒氣が甚しい。石を敷きつめた歩道は雨や雪の時には表面が凍つて滑り易いので通行人は危險が少くない。歩道で滑つて轉んで卽死した例は甚だ多い。此等の例と思ひ比べれば私は轉んで後頭部を打ち僅か五六時間意識を失つた位で其後に何の故障も起らなかつたのは不思議の仕合である。後になつて氣がついて見れば當時に冠つて居た山高帽子は緣の後半が折れてゐた。若し其の時にソフトの中折帽か鳥打帽でも冠つてゐたら或は卽死してゐたかも知れぬ。獨逸で買つた固い山高帽を冠つて居たことは米國では異樣であつたが私に

取つては誠に天佑とも言つてよい程の仕合であつた。

以上三度の災難は何れも死に直面してゐたが私自身の心には其の刹那ヒヤリとしてハットは思つた迄の事で死の觀念は浮ばなかつた。隨がつて死ぬか生るかといふ境に立つているといふ自覺もなければ死ぬかも知れぬといふ恐怖心にも襲れなかつた。唯後から追憶して一歩の違ひで危ふく死んだかも知れぬと言ふ考を禁ずることが出來ぬ。即ち危機一髪で死を逃れ命を拾つて來たと感ぜざるを得ぬ。所謂死に直面しながら死ぬる思をせずに命を拾ひ得たのである。

二　倫敦の街路で腦溢血

第四回目は即ち大正十四年十二月十三日午後十時半頃突然英國の街路で腦溢血を起して倒れた事である。これが原因となつて今日まで身體が不自由であり今年八月には依願免官となつて米櫃を取り上げられ色々の意味の上に於て引續き生死の境に立つてゐる。私は過去五十年間殆んど病氣といふ病氣をしたことがなかつた。年來健康自慢で隨分無理を押し通してきた。大正十四年五月國際教育會議參列の爲に出發する時には病氣の事などは夢にも思はず意氣揚々勇躍

して祖國を辭したがそれが圖らずも命がけの仕事となり又思はず命を拾つて歸國する事になつた。

巴里開催の少年赤十字國際教育家會議を畢へて匆々渡英しエヂンバラ開催の國際教育會議も無事に任務を果し其後英佛獨に各約二箇月づゝ滯在して教育を視察するやら研究資料を蒐集するやら短期間の滯在を出來る限り有益にしようとあせりつゝ伯林から倫敦に歸つて來たのが大正十四年十二月十一日であつた。同月二十三日に渡米の汽船に乘る豫定で英國から神戸までの汽船汽車の切符も買つて用意をすまし十二月十三日は日曜なので同じ大阪高等學校から在外研究員として倫敦に在留されてゐる同宿の日野月明喜氏と一所に日本料理店に晩餐を共にした。食後ゆつくり話をしたあとで散歩がてら徒歩で歸途に就いた。最早宿まで僅か四五町と言ふ所で活動寫眞らしい建物から人が大勢通りに押し出て來る樣子だと思ふ刹那に日野月氏が抱き留めるやうな態度をして大聲で「シッカリして下さい」と言つたのがウッゝのやうに聞えたきりで其の後の記憶が少しもない。

翌朝フト眼を開いて見ると少しも見覺のない大きな室の一隅にあるベットの中に横はつて居る。其の邊には幾つもベッドが列んでゐて看護婦が幾人も其の間を左往右往する樣は何としても病院に相違ない。何時の間に病院に來たのやら少しも譯が分らぬが、心を靜めて記憶を辿つて見れば「前にこんな事がなかつたか」とか「倒れる時にドンナ心持がしたか」とか「年齡は何歲」「平常酒を飲んだか」と誰かに聞れて皆英語で答へたやうな事を沙漠のオアシスのやうに五里霧中の中に思ひ出したが前後の關係は少しも分らぬ。丸で天狗にでもさらはれたやうだ。能く能く見ればシャッから寢卷から全部病院のものである。やがて看護婦が來て氣分はどうですと尋ね顏は勿論身體を全部叮寧に洗つて呉れ又朝食を持つて來て呉れた。併し自分で身體を動かさうとすれば左半身が不隨である。左の手足が自由を失つてゐる。身の廻りの事は勿論何から何まで看護婦の手を煩はさねば何一つ自分では出來ぬ。

私はすぐに昨夜腦溢血をやつたなといふことを直覺した。それは四年前私の知人に腦溢血をやつた人があつて詳細に其の容態を知つてゐたからである。天

涯萬里の異鄕の空でトンデもない事になつたと思つた。身體は不自由であるが精神の作用には何の故障もない。且つ左半身も運動神經は麻痺してゐるが知覺神經は何ともないので運動しようとさへせねば何等の異狀を感ぜぬ。それで心持丈けは平時と少しも違はず少しも重病に罹つてゐる自覺はない。朝食をすまして見れば心持だけは何時もの通りと少しも違はぬので看護婦を呼んで早く私の服や靴を持つて來て呉れ宿に歸つて入浴しようと思ふからと言へば看護婦は笑つてとも角暫らく靜かにお休みなさい其の中にあなたの友人が來て委細の事を話すからと言つて呉れた。昨夜腦溢血をやつて入院した許りの患者が翌朝早や我が宿に歸らうなどと言つたので看護婦には餘程滑稽に聞えたに相違ない。併し私自身には早く我が宿で入浴しくつろいでゆつくり休み度いと思つた。と角する中に日野月氏が來て昨夜の顚末を話して呉れた。前にも述べた通り、二人で並んで街路を歩いてゐると俄に私が左の足を引ずるやうにして跛足し出したかと思ふと直ぐに立ち留まつて身體が左に倒れようとした。同時に口からよだれが出だした。日野月氏は抱き留めようとしたが體重に押されて諸共に街路の

方に倒れた。茲はハイドパークから北に向つた大路で通行人は相當に多かつた。通りかゝりの人が之を見つけて色々と親切に世話をして呉れ、一方には直に警官を呼びに行き一方にはカラや胸のボタンをはづしなどして應急の手當をして呉れた。幸ひ其處の筋向ひの横町にセントメリース、ホスピタルといふ市立の病院があつたので警官の盡力で間もなくアムビユランスが來てそこに入院したのが十一時頃であつたそうである。散歩の途中突然に起つた災難について當時の日野月氏の心配と當惑とは思ひやられる。私の頭に夢のやうに殘つて居る診察の記憶は發病後約三十分の事で其の時には既に多少意識を恢復してゐたのである。つまり發病後全く意識を失つたは僅か三十分ばかりであるから腦溢血としては極めて輕い方と言はねばならぬ。併し入院して診察の時に醫師に聞かれたことも私にはよく解り且つ明かに英語で答へた積りであるけれども後に日野月氏に聞けば他人には言語が不明瞭であつたさうである。當時には言語にも多少の故障があつたのである。併し言語の不自由は私自身にはあまり自覺がなかつた。日野月氏は病氣が腦溢血であつたといふことを私には明瞭に言はず言葉を濁し

て居たのは病人に症狀を明かに言はぬ方がよいと思つたらしい。これは固より當然の注意であるが私自身には日野月氏に之を聞く前からチヤント分つてゐた。

發病の夜午前二時頃下宿の主婦が見舞に來て呉れたさうであるがあまりよく安眠してゐたので起さずに歸つたさうである。其後も私は毎夜よく安眠が出來て不眠に苦しむことは少しもなかつた。

腦溢血後は心身の絶對安靜を必要とする。併し私自身には身體が不自由丈で外には何等苦痛の自覺もないので起上がりさへすれば何事でも自由に自分で出來るやうな氣持がした。隨つて無意識的に時々起上がつて見ようとする。併し一寸でも半身を起せば看護婦や隣りの患者が異口同音に聲を上げて四方から靜かに休みなさいと言つて呉れる。成程と思つて直にベッドの中にむぐり込む。朝食後に服藥すれば何にも用事がない。唯ヂットして天井を眺めてゐる丈である。やがて晝食晩餐とすめば又身體を洗つて貰ふ。氣分が清々となつた所で眠に就く。翌朝までは何も知らぬ。最初二三日は午後の面會時間に在倫敦の知人が數名慰問に見えた。日野月氏は毎日見舞に來る度びに著しく元氣を恢復する

と言つて貰へるので嬉しかつた。私は五十年近く病氣にかゝつた事がなく病院生活を送らとは夢にも思はなかつた。生まれて始めて入つた病院がよりに選つて外國の病院であるとは何たる因果であらう。併し幸にして私は外國の病院をいやな所とは少しも思はなかつた。多少退窟は感じたが淋しさや心細さには襲はれなかつた。病院の主治醫はサーブロードベントといふ倫敦大學の名醫であつた。私は生命が危篤であるかと聞いて見た所が無理さへしなければ自然にそろ〳〵と恢復するとの事で安心した。

三　病源は何か

腦溢血と言へば誰しも大酒を聯想する。私のは大酒の結果でないと言へば如何にも事實を詐つて强辯するやうに聞える。併しその原因には誰も知る通り色々ある。大酒も固より一原因であるが結核性もあれば梅毒性もあり突發もあれば遺傳性もある。單に老年の爲のもある。絶對的に禁酒してゐる人や生來酒を好まぬ人が往々此の病にかゝる事は大酒以外に原因があることを證明して餘ある。私は酒を飲まなかつた譯ではないが近年は飲むといふ程飲んだ事は殆んど

ない。日々の晩酌は勿論しなかつた。今回も船中は禁酒してゐた。歐洲でも極めて攝酒して自から求めては飲まなかつた。發病の當夜もビールをコップ半分位飲んだ位で發病が飲酒の爲めでないとことは私の堅く信ずる所である。それでは何が原因であるかといふことは明白には分らないが凡てを綜合して見れば心身過勞の結果であるらしい。私は他の腦溢血をやつた人の例を多數に調べて次第に之を信ずるやうになつた。倫敦の醫師も「あなたの身體は目下何よりも安靜の休養を要求してゐる」と言つて吳れた。私は差當り發病の原因らしいものに思ひ當らぬがよく考へて見れば祖國出發前から少々無理な仕事をかたづけ航海中にも相當の仕事をつゞけたのみならず上陸後は短期の滯在を出來る丈け有益にしようと努力したので隨分心身を無理に使つた。尙倫敦に歸る前には伯林を起點として獨逸を一周し、丁抹の國民高等學校を視察に出向き、前後約一ヶ月間嚴寒中に旅行して伯林に歸つて更に數日夜更しを重ねて書類を調査し文部省へ出す報告書を書いた。或る夜少し頭が痛むやうな氣がしたのでもう四五枚で結了する報告書を書きやめて其儘にして倫敦に還つた。これが正に病氣前兆であつ

たらしい。尙其二三日前に夜寢汗をかいたこともあり階段を昇る時に足が重い心地がした事もあつた。此等は心身過勞の結果に外ならぬ。就中丁抹の寒氣は最身に泌みるやうに感じた。發病當夜倫敦の寒氣も仲々酷烈であつた。過勞と寒氣とが血壓を亢進させて血管の弱點ある箇所を押し破つたものと見える。尙遡つて考へれば健康を賴み少年時代から心身を無理に使つた過勞が積り積つて其の總勘定の時節が到來したらしい。

病院に見舞に來た一友人は私の平素を知つてゐるので「君はあまり勉强が過ぎやうやられたのだ。僕のやうにずぼらにさへしてゐれば病氣の心配などは決してないと言つた。これは一面の眞理であらう。努力して病を得るよりは少々ずぼらをしても無事で歸朝する方が國の爲になるのかも知れぬ。併し私は幼時から俛焉日有孳孳。斃而後已。といふ禮記の格言や「其の道を盡くして死するは正命なり」といふ孟子の名句を標語として渾身の勇を鼓して自彊不息の努力をして來た。力の續く限り行かれる所まで行かうとかねて思ひを定めてゐた。今になつて考へれば少し氣が緊張し過ぎて身體が負けて來たのである。心身の使ひ方が

過度で破損の箇所を生じたのである。これは思慮の足らぬ結果でもあるが自分の主義の爲に斃れたと思へば軍人の戰死や宗教信者の殉教と同じく內心の滿足はあつても死して悔ゆる事は無い。死して悔いぬ程なれば病んで悔いる事は勿論ない。私は心から自彊不息の努力をして病を得た事については俯仰天地に對して何等恥しい事も怨めしい事もなければ殘念の事もない。

四　命拾ひ

私が生來四たび死に直面した中で最初の二回はとも角として第三回に死を免れたことは眞に天佑とも言つてよい位であるが第四回目に命を拾うたのも本當に儲け者である。溢血が今少しく强ければ勿論卽死してゐる。さもなくとも若し同行者がなく異鄕の往來に行き倒れとなつて嚴寒に晒されてゐたら必ず凍死したであらう。それを思へば日野月氏が同行してゐたことは眞に天佑と言つてもよい。殊に敷石の上に倒れないで日野月氏に寄りかゝつて抱き留めて貰つたことも勿怪けの仕合せである。尙ほ病院が手近にあつて發病後三十分以內に入院が出來たことも求めても得難い僥倖と言はねばならぬ。同じ同行者があつて

發病したとしても汽車汽船中であるとか不便な村落か小都會であつたとしたら私の命は實に危ふかつたのである。私はそれやこれで世界の大都市倫敦の眞中で發病したことゝ同僚の同行者があつた事と名醫に治療して貰つたことを望んでも得がたい幸福と考へてゐる。此の發病は私の一生に取つて大きな受難である。併し私は此の受難にかゝる幸福が伴つてゐる事を衷心から感謝してゐる。

終日ヂットして病院のベットの中に靜臥してゐれば勿論生きてはゐるに相違ないが本當に死を免れてたゞ生きてゐる丈の事である。左の手足は自分の手足でありながら他人の手足と一樣に自分の思ふ通りにならず左の手を一寸右にやるにも右の手を借らなければならぬ。毎朝眼を覺まして第一に頭に浮ぶ觀念は今日もまだ生きてゐるといふ事である。今日は生きてゐても何時第二回の溢血が起つて死ぬか分らぬのが此病の特色である。これは丁度何時爆發するか分らぬ火山の上に立つてゐるやうなもので生きてゐるとは言ひながら生死の境の斷崖の上を歩いてゐるやうなものである。遠く異境に在つて病氣する人は一寸した寒冒のやうなことにも心を痛め神經が過敏になつて少し高熱でもあれば此れ

で死にはせぬかと言つて死の恐怖に襲はれるものだと聞いてゐるが私はこんな重病にかゝつて而も生死の境に立つてゐながら不安で堪えられぬとか不眠に苦しんだとか悲觀に沈んだとか死の恐怖に襲はれたといふ事は一度もなかつた。これは私の詐らざる告白である。これは一にはサー、ブロードベント博士が靜養すれば暇は要るが漸次に恢復すると言つたのと目下危篤の狀態ではないと言つたので安心を得たといふ事もあらう。又一には私の知人が腦溢血をやつて殆んど全快した例を知つてゐる所爲でもあらう。併し又一方には高等學校時代に人生問題に惱んだ揚句生意氣に坐禪に凝つて生死解脫の修養に憂き身をやつしたことも關係してゐるやうである。電光石火の裡に生死の去來を見ることや人生を草露や風前の燈と見る無常觀に馴れてゐるから生に對する執着心が柔らいでゐると共に死に對する恐怖心も薄らいでゐる爲でもあらう。形相を離脫した自我本來の面目を捉へて湛然不動の自性に安住して卽身成佛の境地に悟入せんと精進すればする程それ丈生死の解脫に近づく譯である。私は固より大悟徹底して心身脫落の境地に到達したと自稱自負する資格は無いが彷彿として此の境地

を想見すること丈は出來るやうになつてゐた。眞に生死の考を忘れてゐる時は實に此境に近づいてゐる時である。

何時死ぬか分らぬ身の上でありながら死の恐怖に襲はれなければ生死の境に立つてゐるとしても多少生死を解脱してゐると言つても甚しい誣言ではないと思ふ。これは戰場に立つてゐる軍人が死を恐れぬのと同じ境地であると思ふ。

五　退　院

こんな心地で一日一日と入院の日を送つたが病氣はメキメキと恢復した。二十三日にサザムプトンを出帆する汽船の切符を買つてゐるので夫れ迄に全快すれば米國經由で歸朝しようと考へた。此事を醫師に相談して見ると誰か附添ひさへあれば實行が出來るだらうといふ談であつたので私自身はその積りでゐた。入院後一週間目にベットから下りて椅子にかける稽古をし翌日は看護婦の肩につかまつて室内の歩行を試みた。其の翌日には大きな卓子の周圍を三回歩いて廻はることが出來たので同室の他の患者も手を拍つて喜んで吳れた。入院九日間で愈二十二日に退院といふ事になつた。醫師は二十三日の出帆の事を考へて

吳れたものらしい。二十二日午前十一時自動車で下宿に歸つて久し振りに自分の室に入つた。私の室が階上にあるので階段を昇るのが困難で始めて半身不隨の重病であることを痛感した。病院を出る時は籠鳥が籠から解放されたやうな心地であつたが宿に歸つて觀れば何等病人向の設備がないので早速種々の不便を感じた。取り敢へず看護婦を一人傭ふ事にした。

六　乘　船

半身不隨の爲に起居の不自由は一通りでない事を痛感したので、此狀態では假令附添があつても米國經由は絶對的に不可能と悟り種々考慮の結果醫師とも相談して豫定を變更し翌年一月二日倫敦出帆の日本郵船會社汽船伏見丸で印度洋を經由して歸朝する事に決心をした。日本船なれば船中で自由も利き且つ海上空氣のよい事や一歩一歩祖國に近くことが、恢復を助けるであらうといふ醫師の意見であつた。出帆當日數名の友人に見送られて伏見丸に乘船した。生憎此日は風雨が强くて自動車に乘るにも大層難儀をした。停車場では車付の椅子があつたので長いプラットフォームも樂に行くことが出來た。汽車を降りて船まで

の間は歩行が出來ぬので友人に背負つて無事船室に入れて貰つた。病氣の時に盡された友誼は貧窮の時の友情と同じく心から嬉しいものである。私は巴里から態々倫敦まで看病に來て出帆を見送つて貰つた二人の知己に衷心から感謝する。

船室に大きな姿見の鏡があつて見るともなしに鏡に映つた自分の姿を眺めて其の變り果てた有樣に今更ながらビックリした。血の氣は全く失せ果てゝ顏色は丸で土のやうであつた。此の亡者の相好そのものは本當に自分の姿であらうかと我と我が眼を疑つた。若し三途の河原で亡者に出會ふたならば屹度此のやうであらうと思つた。私は元氣潑剌たる見送りの人達の中に交ざつてゐたので其の對照が殊更に强烈に感ぜられた。生きながら我が死相を見つめた此の時の深い印象は生命のあらん限り一生涯忘れられぬ。三週間以前まで歐洲を胯にかけて飛び廻はつてゐたものが僅か一瞬間の事で全身の氣力を失つて此の慘酷な病態になるといふ人生の有爲轉變を觀念せずには居られなかつた。出帆までは どの船にもあるやうに內外共に賑かな見送人で雜沓してゐる。其の景氣のよい

聲は手に取るやうに私の耳に入つて來る。私は見送りの友人に告別するまでヂットソーフアに腰を下したまゝで一歩も船室を出ることは出來なかつた。

郵船會社は特に私の病氣に同情して出來る限りの便宜を與へて呉れた。浴場と便所とに接近した四人分の一室を私一人の爲に提供して呉れボーイを一人附き切りにし船醫付の看護手を一人バスボーイを一人專用同樣に都合して呉れた。其の爲めに船中は病院よりも下宿よりも遙かに便利となつた。

船は出帆したが天氣は晴れぬ。ビスケー灣に入つてからは天候が益險惡となつた。一月は一年中波濤の最も荒い時である。船の動搖は日日甚しい。食堂に出る乘客が日々減ずる。大濤がデッキの上に絶えず打ち込んで水の流れる音が私の室まで聞える。便所に行く時には振り倒されさうになるのでボーイに身體を支へて貰はねば危ふい位であつた。私は船に强い方で船暈にかゝらなかつた事は何より仕合である。若し此上に船にでも醉つたら本當に生きた心地はしなかつたのであらう。

ビスケーの荒れも程なく止んでジブラルタルに着いた時は朗かな晴天であつ

た。船室の窓から市街の概況を見てまだ人間界に生きてゐる心地が始めて明瞭になつた。これが所謂蘇生の思といふものであらう。ボーイに扶けられて甲板に出て遙かに對岸のアフリカの連山を見た時には座ろに羅馬史上のカルタゴ戰爭の事などを追憶した。間もなく船はマルセイユに着いた。窓から港の狀況を見るのは何よりの樂しみであつた。今迄は他に乘客に知り合もなく食堂に出られぬから乘客とは一人の知合も出來ず獨りで船室に閉ぢ籠つてゐたがマルモイユで上田蠶糸專門學校の遠藤教授が知人の紹介狀と依託品とを持つて乘り込んで來られたので俄かに談相手が出來て無聊を忘れることが出來た。此港では此年の七月六日に秩父宮殿下と同時に上陸したので當時の光景がまざまざと眼前に現はれた。同時に當時の私の意氣込と心身共に弱り果てた現狀とを思ひ比べぬ譯には行かなかつた。

七　片手で音信

マルセイユから出帆する迄に倫敦で世話になつた人や日本の家族や友人に手紙を書いた。私の半身不隨が左側であつた事は私に取つては非常の仕合であつ

た。右の手が自由に利くのと頭腦の作用に故障が無かつたので手紙を書くことには少しも差支ない。又左の手の代りを右ですることが出來る限りは差し當り不自由を感じなかつた。併し健康時には左手の用は左程大切と思つてゐないがいざ用をなさぬとなれば其の不便は夥しい。手紙を書いてもキチント封筒に入れる事は片手では決して思はしいものでない。郵便切手を一枚づゝちぎるのも片手では一寸六つかしい。

八　疾病觀の修正

私は自身に年來無病、健康、精勤が自慢であつたので他人の病氣に對する理解も同情もなかつた。家族の風邪、腹痛、下痢等は悉く不攝生や不注意の結果とのみ思つて之を咎めてゐた。此考を押しつめれば結局疾病罪惡論に到達するので疾病の苦痛は過去の罪惡に對する賠償であると心得て居た。此の持論から推せば私の今回の病氣も過去の罪惡に對する自然の報復であつて私は今其の賠償をしてゐる事になる。斯の如く解釋することも固より一理ではあるが私自身では幼時から心身を過度に勞した結果が積り積つて此の病を來したものと信じてゐるの

でむざ〳〵これを罪惡と斷定することは何としても內心の欲求が滿足せぬ。つまりかゝる冷刻な裁判では內心に慰安の求めようがない。斃れるまで道の爲に盡さうと眞劍に努力することを罪惡と一蹴し去ることは私の良心が滿足せぬ。そこで私は何時の間にか私の疾病觀を一變するやうになつた。疾病はは固より一面に於て過去の罪惡に對する自然の報復とも見ることが出來る。切論すれば疾病其のものを一種の罪惡とも見ることが出來る場合も少くないが又見方によつては疾病は人を反省せしめ幾多修養の機會を與へて呉れる。さしづめ私の如きも此病にかゝらなかつたならば自分の疾病觀に就いて深刻に反省する機會に遭遇しなかつたかも知れぬ。斯の如く思ひ返せば疾病は人生に有益な方面があるものと言はねばならぬ。私も此の疾病が私に幾多の教訓を與へ人生に就いて深刻な考察思索を加ふる機會を與へたことを感謝してゐる。

九　忍耐の强制と名利心の離脱

發病直後入院してゐた當時を追想して見れば心身の絶對安靜が要求されてゐるから心身の自由活動は一切禁止された。あらゆる自由行動は拘束された。自

分の思ふ事は何一つ勝手には出來ぬ。よし許されたとしても自分の身體が不自由である。これはあらゆる自由を奪はれた奴隷の境遇と似通ふてゐると思つた。奴隷は身體が健康である丈けが大變な相違である。若し犯罪人となつて監獄の獨房に收容されたとしたら丁度このやうな心持であらうと思つて見た。退院して下宿に歸つても友人と長談も出來ず本も讀まれず、外出も出來ず、一室內に閉ぢ籠つて終日天井を眺めて日暮れと夜明けを待ち焦れ三度の食事と服藥との外に何の用もないので入院中との差は極めて少い。乘船してからも日々の行事は殆んど之と大差ない。海上生活の單調は陸上よりも一層甚しい。海の色が變らぬやうに周圍の物も人も一篇一律である。此の單調の生活を五十日近く强制されることは健康の人に取つても忍耐を養ふ程の訓練である。況して私のやうに半身不隨で生死の間を往來してゐる半死半生の重病人に取つては忍耐は絶對的に强制される。此の强制に服從せぬことは絶對的に不可能である。必要は發明の母なりといふ西諺があるが私は之を燒き直して必要は修養の母なりと言ひ度い。必要に迫らるれば修養し度くないことや爲にくいことも已を得ず修養するやう

になる。英語でペーシエントといふ語は本來ペーシエンスといふ忍耐といふ名詞の形容詞語形としては辛抱强いといふ意味であるが同じ字を名詞に用ふれば病人といふ意味になる。平素は何氣なしに此語を用ひてゐたが自分自身に重病にかゝつて大辛抱を强制されて見れば此語の用法が成程と合點が行く。私は生來短氣であつて一寸の事でもの自分思ふ通りに行かねば氣がいら〳〵してどうも辛抱が出來にくい。他人にして貰ふのが面倒であれば少々我慢をしても早く自分で遣つて仕舞ひたくなる。併し今や自分獨りでは何一つ出來ず一寸の事も他人の手を煩はさねばならぬ重病の身の上となつてからは忍耐は最早我が自由意志の範圍内ではない。腦溢血の患者には酒煙草は勿論、珈琲、辛子、胡椒のやうな刺戟物は一切許されぬ。肉食を避けて菜食を主にするがよい。身體の運動が不足するから不消化を來さぬやうに少食するがよい。飲食物は勿論其他の俗氣を出しても其の慾望を滿足する途が杜絶されてゐる。隨つて已むを得ず自ら慾望の羈絆を脱し、期せずして脱俗の生活を送ることが出來る。慾望が何一つ滿足されぬと定まれば、慾望も自ら起らなくなり、仙人や道士の脱俗無欲の心境も彷彿と

して想見することが出來る。私は自分に此病にかゝらず自ら此境地を踏まなければ到底此心境を理解することは出來なかつたと思つた。私は生死の境に立つて何時死ぬかも知れぬといふ境遇であるからこそ命を拾つてゐる間が仕合せと衷心から感謝する許りで此の上に立身出世しようとか功名を立てようとか、大業を爲さうとかいふ心は毛頭浮ばない。卽ち自ら求めずして名利の心から離脱したのである。かゝる虛無恬淡な心は生來未だ嘗て一度も體驗した事はなかつた。

十　地中海上の冥想

斯の如き心地で過去を追憶して見れば五十年間の往事は茫々として夢の如く私の一生は發病と共に一旦すんで仕舞つて其の後は全然餘分の事のやうに思はれる。過去は自分の事でありながら最早自分の事でない第三者のものとして思想に浮んで來る。丁度現在の自由の利かぬ左の手足のやうである。發病後は死んだでもなく、しつかり生きてゐるのでもなく生と死との間に漂へる一種曖昧の生活である。而かも自分の身體は靜かに地中に埋もつてゐるのでもなく、地上を横行濶步してゐるのでもなく、船中のベットに横臥しながら航海してゐるのが宛

がら天地の中間に浮遊してゐるやうな心地を有たせるのである。

發病の當時は腦溢血を起したといふことを直覺し其の原因に思ひ及び今何時死んでも怨みは無いと思つてゐたが上述のやうな心境で地中海を進んで行く間に氣分も少しづゝよくなり心は自から人生問題の思索に向ひ青年以來築き上げて居た人生觀を更に練り直すやうになつた。

船中には讀み度いと思ふ本が無い。よしあつても難解の讀書は病氣に禁物である。勢ひ書籍を離れて直接に自己の思索に訴へねばならぬ。禪宗は不立文字を標榜するが私の船中の思索は期せずして不立文字である。よし直指人心見性成佛は出來ぬとしても之に近い所まで接近することは出來ると思つた。これに就いて記憶に浮んで來たのは山崎闇齋の門人三宅尚齋が藩主の譴を蒙り武藏忍に禁錮せられ書の讀むべきなく筆の書くべきなく終日靜坐して舊日得し所の理義を熟思し大に發明する所があり釘を以て血書して名著を殘した事である。又此外佐久間象山や吉田松陰などが獄中で思索した心境を想見せずには居られなかつた。かゝる思索に連日を送つた事も私に取つて一生に一度の體驗である。

私は兼々人間の生命は父子代々相傳のものであり父子は心身共に一體のものであることを確信するもので此の信念を擴張して民族全體に及ぼして行けば民族の生命は一體であり而かも永遠無窮のものであるといふ結論に到達する。民族の生命が永遠無窮に連續するものと考へ自己の生命を之と一體不離のものと體認すれば自己の生命にもやがて永遠無窮の意義が生じて來る。私は繰り返し繰り返し此の理路を辿つて生命無窮觀の思索に耽つた。

私は此の解釋によつて假令一生中に千歲不朽の大業を爲さずとも自己の生命に不朽の意義と價値とを見出すことが出來るといふ確信を得た。之を三宅尚齋や會澤正志の學說と比べて其の行き方は固より趣が違ふが結論の本質に於ては大差はないものと信ずる。大鹽中齋が洗心洞劄記に次のやうに道破してゐるのは大に我が意を得てゐる。

常人天地を視て無窮となし、吾を視て暫となす。故に欲を血氣壯時に逞ましうするを以て務となすのみ。而して聖賢は卽ち獨り天地を視て無窮となすのみならず、吾れを見て亦た天地となす。故に身の死するを恨みずして心の死す

るを恨む。心死せざれば卽ち天地と無窮を爭ふ。是の故に一日を以て百年とし、心凛乎として深淵に臨むが如く須臾も放失せざるなり。故に又嘗て物を以て志を移さず。欲を以て壽を引かず。要するに人欲を去りて天理を存するのみ。

此心掛けを以て充實した生活を營んで行けば生理的の根據から自己の生命の無窮を會得する許りでなく精神的に天地と無窮を爭ふやうな生活價値や人格價値を創造することが出來よう。我等は及ばずながら駑鈍に鞭つてかゝる理想を追求して行きたい。

北歐の一月は何處に行つても天候が惡いが南歐の天地は格別に明るく地中海を過ぎてゐる間は天氣殊更晴朗であつた。仰いで際涯なく澄み渡る蒼天を眺め俯して底知れぬ碧海の水を見れば千古萬世永遠不易の色を直感する。蒼海の一粟に均しい我が身も天地と一體の理を會得すれば天地と共に永遠無窮なる意義を感得することが出來る。無窮の天地と一體に我が身を觀ずれば厖々たる生死の如きは固より問題ではない。

かゝる感想を抱いてゐる頃に伏見丸はコルシカ島の附近を通過した。コルシカ島は言ふ迄もなく不世出の英雄ナポレオンの誕生地である。此地を通過する旅客はナポレオンの英名を追想せぬ者はあるまい。彼の人物に就いては固より議論の餘地はあるが彼の英名に至つては蓋し永遠不易であらう。私も彼の偉業を追想せずにはゐられなかつた。永遠に追想される人は永遠不死の生命を持つてゐるではないか。

地中海の彼方には基督の誕生地があり印度洋のかなたには釋迦の祖國があり黃海の彼岸には孔子の墳墓がある。これ等を思へば神戸に着くまでにはなかなか思索追想する事柄が多い。

十一　歸　朝

伏見丸は豫定より二日後れて二月十八日に神戸に入港した。早朝に拘らず親戚知人が出迎に來て吳れてゐた。私はしみ〴〵と生きて祖國の土を踏む嬉しい心持を味はつた。妻は發病以來私の生死に就いて言語に盡し難い心配をしたさうであるが一方に生きて歸つたのを喜ぶと共に恢復のはかばかしくなかつたこ

とにも驚いたさうである。親戚のものも一同この樣子では一寸元の通りになるまいと思つたさうである。倫敦での恢復は迅速なもので九日位で退院とは日本では腦溢血患者として其の例がない位である。乘船の時も醫師の見込通り神戸着頃には全快の見込といふ電報を打つたのである。又右の手が自由に利くので發病後家族には絶えず通信してゐたので幾度も自筆の手紙を見た妻などは一層輕く思つてゐたらしい。

十二　病中の執務

妻や親戚は何と思つてゐても私自身には左の手足の不自由の外には何等訴ふる程の苦痛がないので直ぐに元の通りになれるものと信じてゐた。やがて大阪醫科大學の和田博士に診察を請ふた。血壓は年齡相當であり動脈硬化も甚しい程度ではない。これで腦溢血は不思議な位であるから專心に養生さへすれば恢復するのみならず再發の虞も少ない。併し病氣が病氣であるかち用心をしないと再發が恐ろしい。再發の場合は初回より重いときまつてゐる。心身共に安靜が理想であるから身體の上にも精神の上にも努力といふ努力を控へねばならぬ。

講話、演說は勿論講演、著述、讀書も避けねばならぬ。尙食物上の注意は發病當時と同樣である。との事である。これは一々當然のこと許りである。今日まで頭腦許りで生活して來たものが精神活動を封じられて仕舞へば死刑を宣告されたも同樣、此の世に生活してゐる意義も價値もなくなつて仕舞ふ。そこで肉體の生命が大切か自分の職責が貴いかといふ問題に逢着して來る。

約十ヶ月不在中は校長代理を置いてあつたので私は不在でも學校の事務は進行してゐた。歸朝してからも其儘の積りで一切を委任して置けば固よりそれでも行けたのである。併し歸朝と同時に校長代理を免じたので校長の職責は私の雙肩に掛つて來た。此の職責を擔ひながら校務を放棄して置くことは私の責任感が許さない。二月三月は一年中で校務の最も多忙な時である。卒業生の及落は三月の初めに決定せねばならぬ。續いて在校生の進級成績を査定せねばならぬ。それが終るか終らぬかに入學試驗といふ大混雜が來る。少々亂暴であつたが醫師や他の職員の止めるのも顧みず職員會議にも出席し卒業生や生徒に必要と思つた訓話もやつた。講演中壇上で腦溢血を起した例は世上に少くないので

私も内心には私かにこれを恐れてゐた。併し已むに已まれぬ心から歸朝後間もなく全校の生徒に一時間半許りの長談義をやつたが壇上に昇る時には軍人が戰場に臨むと同じく全く命賭けであつた。此の時は豫定より大分長くなつたので職員生徒もハラハラして居たさうであるが降壇した時には大分充血して顏が赤くなつてゐた。併し家に歸つて直ぐ水枕をして安靜に休息したので二時間許りで氣分は元の通りとなつた。斯の如く少し充血して血壓が上つたと思ふ時には何時も頭を冷やし安眠をすることにしたので勤務が障つたと思つた事はない。毎日出勤すれば出來ぬこともなかつたが職員の忠告で隔日に出勤することにして用事があれば職員を官舍に來て貰ふ事にした。外部の交際や校務以外の用事は皆謝絕した。

一方には百方養生治療に力を盡したので、順調に恢復し、五月の校長會議には上京する積りであつたが恢復期の長途旅行は再發の危險が伴ふといふ醫師の警告に耳を傾けて上京を中止して代理の人を出席さした。

夏季休業前に全快を期したのが全快せず酷暑の苦惱がすんで九月始業までと

思つたのもあてがはづれ秋冷の候には大によかつたが寒氣が襲來して恢復が又停滯した。斯の如く恢復は豫期通りには行かなかつたが絕えず少しづゝは進行してゐる。朝夕私に接してゐる家族には恢復が眼につかず其はか〳〵しくないのに氣を揉んでゐたが二三月も隔てゝ見舞に來た人は皆見違へるやうによくなつたと言つて呉れる。歸朝の當時には少しも動かなかつた左手が動くやうになり指も多少の屈伸が利くやうになり左足は著しく力が出來て歩行はメッキリ容易になつた。私の病氣について最初から家族の相談を受けたゐた醫學士は私が歸朝して一ヶ月以内に自分で腦溢血を起して而も其の日の中に死んだ。又五年前に腦溢血で倒れ私が出發する頃には殆んで全治してゐた知人は其の後三月目に再發で倒れた。其の他新聞に腦溢血で死亡したといふ記事があれば誰れかれの別なく目が留まる。見舞に來た人も皆自分の身内に同じ病にかゝつた人の例や治療法などを談して行く。それやこれやで腦溢血は五十歳前後には極めて普通の病氣であることゝ私のは其中でも割合に輕かつたこと殊に入院九日位で無事歸朝が出來たことは寧ろ奇蹟のやうであるといふ考へを持つやうになつた。

結局此勢で行けば全快は時の問題で少しづゝでも恢復して行けば何時かは全快するといふ自信を得るやうになつた。

十三　病中の著述

私は多年の教育上の經驗と學理の研究とに基いて大正十三年に高等女學校用の女子修身書を著はした。當時續いて中學修身書を著はす意圖を有つてゐたが之に着手するに至らぬ中に突然海外に出張することになつた世界大戰後の歐洲を是非一度見度いと願つてゐたので大喜びで出發した。巴里の少年赤十字の國際會議とエヂンバラの國際教育會議とに參加して現代人を動かして居る人道思想の本質に觸れて大に得る所があつた。又英佛獨の教育を視察して大戰前に見た所と比較し且つ戰後の現狀に於いても啓發せられる所が多く容易に得難き體驗を得た。此等に就いては相當の材料を蒐めて歸つたが孰れも俄かの發病の爲に持つて歸つた儘で整理する餘裕さへない。意外の重患に拘らず命を拾つて歸朝した事は此上もなく嬉しい事であるが此等の材料を其儘にして置き折角得た感想や印象を其儘に葬つて置くことは此上もない遺憾である。

病中ながら此の遺憾があり氣にもかゝつて居る所に歸朝した年の五六月頃は氣分が著しくよくなり氣力も大分生じて來たから外遊前から計畫してゐた中學修身書を書いて見ようと考へた。私も今は何時死ぬか分らぬ身の上であるからよし一命を失つても書物が殘れば無爲にして死ぬより優つてゐると思ひ且つ外遊中にも構想に意を用ひてゐたから今次の外遊の印象や所感を材料に用ひて書けば多少歸朝後の遺憾を少くすることも出來ると思つた。尤も着手はしても未成の中に死去すればつまらぬと思ひ且つ其の完成には多大の杞憂をを抱いたが既に外遊前に完了した女子修身書といふ基礎が出來てゐるから之を適當に添刪すれば比較的容易く出來ると思つた。加之道德には男子と女子と高下二樣の標準がある譯でないから我が國從來の教科書のやうに中學校の分と女學校の分とは大差がない方が至當である。併し何分左手が少しも利かぬので書き物をするにはなにかにつけて人に言はれぬ不便がある。そこで最も簡單な方法を考へ女子修身書を原本として訂正すべき所を鉛筆で其の中に書き入れ又新材料は別の紙に鉛筆で書き加へ其の清書を他人に依賴し清書の出來上つた分に就いて更に

修正を加へた。醫師の警告によつて病氣再發の危險を知りつゝ飛んで火に入る夏の蟲の愚を學ぶには忍びないから注意の上に注意を加へて心身共に過勞にならぬ程度を見計つて仕事を進めた。かくして其の年の十月末までに中學修身書五卷を脱稿し且つ其の印刷を完了した。

卷の四の原稿を半分位書いてゐる頃に頭が少し痛んで來て筆が執れなくなつたので一時はとても本書の完成は出來まいと悲觀したが四五日靜養して再び平日の通り恢復したので執筆を繼續することが出來た。

中學修身書が完成したので之を基礎として之に小修正を加へ更に實業教育に適切な事項を加へて實業修身書を作つた。凡そ修身教授は中學校と實業學校とは同一の標準であるべきものであると考へたからである。道德は萬人の公道であつて職業や地位によつて本質が違ふべきものではない。從つて此の萬人の踏むべき公道の以外に特殊な實業道德といふものが存在する筈はないのである。天地の公道、人倫の常徑たる人道を實業の上に行ふのが實業道德といふのが私の解釋である。此の思想を以て書いた實業修身書は同じ年の十二月に脱稿し翌年

一月に印刷を完了した。

其の後に兩書の教授參考書の編纂に着手したが既に發病後一年以上を經過し氣分も餘程恢復し著述には大分馴れて來たので其の原稿は皆原稿紙に自分で萬年筆を用ひて書き他人の手を煩はすことは少なかつた。四月頃に卷五の原稿を書いてゐる頃に卷一以下の印刷に着手して校正が廻はつて來るやうになり一時起稿と校正と重り合つたので再び頭が痛んで來て其の恢復には一週間以上を要したが再び元の元氣が出て來て六月の下旬には全部印刷校正を完了することが出來た。

十四　病中の慰安

外遊中の發病は私に取つて一生涯の大頓挫には相違ない。併し道の爲に斃れたと思へば假令倫敦で卽死してゐたとて天を怨み人を尤めることはない。此の外遊によつて一方には戰後の歐洲を見て多年の素志を遂げ容易に得難き印象や體驗を得これに基いて不完全ながら短時日の間に右の二書を著はすことが出來たのは全く外遊と腦溢血との賜物であり記念であるとも言ふことが出來るので

私は病氣の爲に身體は不自由になつたが幸にして頭腦には何等の故障がなく却つて病氣の爲に世俗の煩累を避け人生問題に就いて專心沈思默考することが出來たことを感謝する。尤も私が若し病中に著述をしなかつたならば或は今少し恢復が早かつたかも知れぬと思はれる。併し私自身としては無爲閑居して無意義無價値の馬齡を加へるよりも假令多少命を縮めても會心の仕事をする方が內心の滿足を得られる。此の二書の中に多少でも私の精神が籠つてゐれば私はそれで十分の慰安が得られる。此本を書いてゐる時には此本が完了さへすれば最早何時死んでもよいと思つてゐた。

十五　退　官

今年七月の終りに苦熱があまり甚しかつたので高野山に避暑した。高野山の涼氣は下界では到底想像のつかぬ所で滯在一ヶ月許りで餘程氣力を恢復したと思つた。此調子ならば全快の日も愈々近づいたと喜んでゐる最中晴天の霹靂の如く急轉直下私の身上に變化が起つて俄かに無職の浪人となり私は官吏としての生命を失つて仕舞つた。卽ち官僚としての橫死を遂げたのである。

八月二十日に大阪で會見したいといふ文部省專門學務局長からの電報があつたので急遽高野山を下つて會つて見た所が「貴官の病氣も大分長引いてゐるから此儘在職してゐては却つて一大事になることがあるかも知れぬから此際一旦引退して專心靜養し身體健全となつた上で再勤するやうにしては如何」其の際には及ばずながら盡力する」との事である。私はこれは後任を定めての上の諭旨であると觀破したのでそれは辭表を出せとの內意であるかと反問した所が其通りであるとのことで私は此際未練を殘して女々しき事を言ふべき所ではないと思つて卽座に紙を求めて辭表を書いて渡した。

私は辭表を書きながら山鹿素行が聖敎要錄の事から北條安房守に呼び出された當時の覺悟の樣を思ひ出さずには居られなかつた。素行は呼び出し狀を見ると共に出頭の返事を出して立ちながら遺書を認め且つ死罪を仰付けられた場合に公儀に差出すべき一通をも認めて懷中にして行つた。素行を先師と尊んでゐた吉田松陰も其の平日の覺悟筋に感服し言を極めて之を稱揚してゐる。

私は病氣の儘現職に居たのでは十分に職責を盡くすことは出來ぬことについ

て久しく自責の念に苦しめられてゐた。この心情を本省に傳へて貰つた事もあつたが氣永に養生せよとの慰撫の言に甘へて其の日其の日を送り既に一年有半に及んだのである。前年の夏には增俸の辭令を受け其の年末には一人前の賞與迄貰つてゐたので私は本省から病氣に拘らず優遇して貰つて居るのだと得意になつてゐた。其後內閣が變り大臣が二度變つて此方針が變らうといふ事に氣がつかなかつたのは私に誰にもある世才が足らなかつたからである。

職務が重いか生命が重いかと言ふ事に就いては議論の餘地があるが舊道德に教育された自分から言へば生命を賭しても職責を盡さねば內心の滿足が出來ぬ。それで若し私が辭職し度いと願つても本省でどうしても許可せぬものとすれば私は、職責に殉死するやうな事がないとも限らぬ。此點から考へれば本省から此諭旨があつたのは之を善意に解釋して本省では私の生命を大事に思つての事であると了解するのが最も素直の道筋と言はねばならぬ。私の知人は私が外國に行きさへせねばこんな病氣にはならぬ。私を病人になしたのは文部省の所爲である。文部省は海外出張を命じて置いて病氣になつたからとて免官にするのは

あまり殘酷ではないかと言ふ人もある。併し私は今まで一年有半も病氣のまゝで在官さして貰つて居たことを過分の恩惠と思つてゐた。又他の人は私が昨今全快に近づいてゐる樣を見て此れならば退職する必要はなかつた。加之今日まで病氣の儘で務まつた位であるから段々に全快して行く現狀である以上猶更此儘に在官してゐても差支ないと言つて切に勇退を惜しむと言つて吳れた。これは私を最員にして言つて貰つてゐるのであるが所謂世間普通の挨拶であつて眞に私の爲を思つて言つて貰つてゐるとは感ぜぬ。若し普通の人の挨拶のやうに何時までも病中に責任を負ふてゐることが私の爲であると言ふのは結局最員の引倒しになつて仕舞ふのである。私の場合は退職の必要に迫つてゐないのに强制的に退職させたのは政治上の意味が濃厚であり過ぎて學校長の異動が地方官の交迭と同じやうになつては其の地位に安んじて職を盡すものが無くなるであらうと言ふ友人もあるが私自身は今回の私の免官は辭令の文字の通り依願免官であつて本人の辭職の願意を聽許されたもので私は自己の自由意志によつて退官を希望して退官したのであると信じてゐる。本省の所置としても病氣の外に

は何等政治上の意味がないとした方が公明正大であると思ふ。そこで病氣以外の意味有無に就いては殊更に穿鑿立てをし度くない。

病氣の爲に退官するのは實に已むを得ない事情で何人が考へても不都合と思ふ所はない。此公明正大な理由に於て依願免官となつた事は同じ退官するならば他の曖昧な理由よりも此の方が仕合せであると思ふ。誰も永久に校長であることは出來ぬから一生に一度は早晩必ず退職せねばならぬ。此度の病氣退職は私に取つて適當の時機であつたと思ふ。然らば今少しく早く自發的に退職すればよいではないかといふ考もあるがこれは今か今かと全快を待つてゐたのと創立時代から手しほにかけてゐたので學校を去ることが如何にも名殘惜しかつた事は私をして自發的の退職の時機を後れしめた所以である。併し私は既に三回の卒業生を送り出し孰れも各大學で相當の成績を示してゐるので創業の功は半ば成つたものと見て内心に滿足と慰安とを見出すことが出來る。

私が二十七年前に初めて文部省に奉職して以來最近まで連續した官吏としての生活は依賴免官の辭令一枚で消滅した。再び健康になつたら又勤めて吳れと

いふ話は固より當にはならぬ。其の中に復活すると否とは主として私の病氣の恢復の程度如何の先決問題によつて左右される。此の意味で私は俸給生活者としての生命も今日は尙ほ生死の境に立つてゐると言ふことが出來る。

身體の上から言へば私は全然再發の危險を脱してゐると斷言が出來ぬ以上は今日もまだ生死の境に立つてゐるものと言はねばならぬ。退官して仕事が無くなり樂しみが無くなつて元氣を失ひ張合が拔けて急に氣力が弱つて死亡する人がある。私も此仲間に入れば退官は卽ち死亡を意味するやうになるので俸給生活の死がやがて肉體の死となる事もある。併し退官後約二ヶ月經つた今日心身共に其後著しく恢復した事を感じ此の文が書ける位であるから死よりは寧ろ生の方が勝つてゐると思ふ。併しまだ生死孰れとも明確に斷言し難いから矢張り依然として生死の境に立つてゐる。

俸給生活や肉體生活の上では今日は生死の境に立つてゐるが精神生活の上から言へば私の生命は官職の有無によつて必ずしも生死や損益はないと確信する。此意味に於ては或る程度まで生死の境を超越してゐると思ふ。私は最早老人で

あるが今後長くもない餘生を生死の境を超越した方面に修養を積み度いと願つてゐる。私は僭越ながら最後に三宅尚齋の詩を引用して私の衷心の希望を表はしたいと思ふ。

富貴夭壽不二心　但向面前養誠心
四十餘年學何事　笑座獄中鐵石心

現代教育概觀
定價參圓九拾錢
（大語製本）

昭和四年十一月二十五日印刷
昭和四年十二月三日發行

著作者　大阪市天王寺區上本町八ノ一二　野田義夫
發行者　東京市神田區淡土代町二ノ一　鈴木省三
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二　吉田松次
（秀英舍印刷）

版權所有
野田

發行所　東京市神田區美土代町二ノ一　株式會社人文書房
振替東京八一二七七
大賣捌所　東京・岩田文榮堂　大阪・柳原書店　名古屋・川瀬書店　久留米・金文堂

I+3R-5

終